

学習者の自己評価・相互評価による学力向上を目指した 音楽科授業計画（3）

三村 真弓 増井知世子 原 寛暁 徳永 崇

I. はじめに

平成20年3月に学習指導要領が改訂になった。音楽科では共通事項が設けられ、音楽の諸要素や用語・記号が指導内容として明示された。これまでの学習指導要領では、音楽の諸要素等を、「感じ取って」「理解して」、「表現を工夫すること」「聴くこと」となっていた。このことによって、表現する、あるいは鑑賞する活動自体が目標とされる音楽科授業が非常に多かったといえる。しかし今回の新学習指導要領では、表現と鑑賞の指導を通して、共通事項の内容を「知覚し」、「感受すること」となった。すなわち、表現や鑑賞の活動が目標とされるのではなく、共通事項の内容を知覚・感受することが目標とされなければならないのである。従来の活動主体の音楽科授業では、学習内容が曖昧になりがちであり、音楽科としての学力向上を目指すことが難しかった。新学習指導要領の共通事項設置の視点は、従来の音楽科授業を改善していく上で、大きな礎となろう。

本研究者たちは、音楽科の学力向上を目指し、一昨年からは、学習者の自己評価・相互評価による音楽科授業の改善を試みている。このプロジェクトのコンセプトは2点ある。第1は、学習者の主体的活動を保障しながらも、学習内容を確実に定着させ、音楽科としての学力を向上させようとするものである。自己評価表によって学習内容を学習者に意識させ、また相互評価表によって学習者の主体的活動を促進する。第2は、認知領域、情意領域、精神運動領域の3面から、バランスよく学習目標を設定し、しかもそれらの学習目標が低次から高次へと向かうように配置を考え、題材構成と授業構成を構築するというものである。3領域の学習目標の理論的背景は、アメリカの音楽教育学者T.A.レゲルスキの著書、*Principles and Problems of Music Education* (1975) に依拠している。

本研究者たちのこれまでの研究から、学習者の主体

的活動には、基礎となる技能や知識が必須であることが明らかとなった。そこで今年度は、中学校1年生を対象としたアルトリコーダーの指導と、中学校2年生を対象とした「リコーダーとギターによるアンサンブル」の題材に関して、評価表を用いた授業を行った。

(三村 真弓)

II. 中学校1年生を対象にした授業の概要と授業結果の分析・考察

1. 授業の概要

中学校1年生を対象にしたアルトリコーダーの指導に関して、自己・相互評価表を活用した授業を行った。授業実施期間は2008年9月から11月にかけての計8時間である。ただし、各50分授業の中で、アルトリコーダーの学習に充てた時間は15～20分である。筆者は中学校1学年の授業を2クラス担当しているが、自己・相互評価表の有効性を調べるために、1年A組を統制群、B組を実験群として、B組のみ評価表を活用した授業を行った。

2つのクラスで、指導方法や進度をそろえるようにした。指導方法は、次のような流れで行った。

- (1) 教材楽曲の譜読みをさせる。全体でドレミ…で歌わせる。この際に、楽譜に読み方を書いた方が良い生徒にはドレミを書かせる。
- (2) 新出の運指について、アルトリコーダーで実際に示しながら説明する。
- (3) 個人練習をさせる。(約3～5分間)
- (4) 全体で何回か合わせる。
ここまでが共通の流れで、B組では(5)(6)が加わる。
- (5) 隣同士のペアのうち1人にピアノ伴奏に合わせて演奏させる。もう1人は観察・評価する。交代して同じことを行わせる。演奏後、運指がまちがっていたり、アドヴァイスがあれば教える

表1 アルトリコーダー 自己・相互評価表

アルトリコーダー 自己・相互評価表											
					1年 組 番 名前 ()						
					ペアの友達の名前 ()						
*評価の尺度											
5		4		3		2		1			
とても								全く			
よくできた								できなかった			
上の5～1の尺度にしたがって、あてはまる数字を○で囲んでください。											
月/日	曲名・内容			自分について					ペアの友達について		
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	

ように促す。

(6) 自己・相互評価表に記入させる。

自己・相互評価表は表1のような形式である。評価の尺度については、“正しい運指でスムーズに吹けている”を5、“運指は正しいがスムーズに吹けていない”を4、“運指を1つまちがえている”を3、“運指を2つ以上まちがえている”を2、“全く吹けていない”を1とした。

ペアの1人が評価表に記入する時間は約30秒とした。相互観察の時は、お互いに演奏する様子をよく観察していた。教え合いの場面はたまに見られる程度であった。評価表は毎時間の終わりに回収し、授業者がチェックして検印の上、次時に返却した。概ね、自己評価より他者評価の方が少し得点が高かった。音楽の成績の良い生徒は、自己評価がきびしい傾向にあった。

8時間の授業で扱った教材と教材の特徴とねらいは次のとおりである。

- ①オーラリー…ハ長調。低いソ(ト音)からファ(1点ハ音)までの低音域の曲。“ホー”と暖かい息を吹くようにして低い音をきれいに出すこと。低いシ(ロ音)の運指に注意。
- ②アニーローリー…ハ長調。前半の8小節だけの教材である。高いシ(1点ロ音)の運指に注意。“サミング”という用語と意味を覚える。音の跳躍部分をきれいに吹く。
- ③ラヴァースコンチェルト…ハ長調。2重奏になっている。評価カードでは第1パートのみを評価対象とした。パートのメロディのかけあいをききながら演奏すること。第1パートには1点ロ音、第2パートにはロ音が出てくるので運指を混同しないようにする。
- ④附属生の指体操(前半)…ハ長調。左手を中心とした運指(1点ハ音～1点ト音)とサミング奏法による高音部分から成る。運指の確認と定着をね

らいとする。

- ⑤附属生の指体操(後半)…低音域中心の部分、低音域から高音域へ順次上昇していく。運指の確認と定着をねらいとする。
- ⑥威風堂々…ハ長調。ファのシャープ(1点嬰ハ音)の運指を覚える。低音から高音への跳躍をきれいに吹くように指示する。反復記号にしたがって、演奏順序をまちがえないようにする。
- ⑦きらきら星…ハ長調。高いシのフラット(1点変ロ音)の運指を覚える。
- ⑧おどるポンポコリン…ハ長調。1点変ロ音の運指の定着をはかる。サミングにも慣れさせる。なじみのある曲ということで、読譜力だけにたよるのではなく、まず心で歌いながら練習する中で運指を覚えることも意図した。

低音域中心の曲に始まり高音域の曲、広い音域の曲、シャープやフラットの加わる曲と、少しずつ難易度を増した教材の配列になっている。ほとんどの教材は器楽教科書(教育芸術社)からのものであるが、「附属生の指体操」は本校音楽科のオリジナルであり、「おどるポンポコリン」は他の教材集から取り入れた。

主な指導目標は、“正しい運指でテンポどおりに吹けるようになること”とし、高音域ではサミング奏法できれいな音を出すことを心がけさせた。今の段階ではタンギングやフレーズを感じて吹くことはあまり指導していない。

2. 授業結果の測定としての実技テスト

上記の全教材を学習後、「威風堂々」の前半8小節部分を課題として、実技テストを行った。この教材を課題として選んだ理由は、適度な難しさがあると判断したからである。最終時に練習した「おどるポンポコリン」は音の動きが激しく、課題とするために区切らなければならないフレーズが長いという理由で課題に

しなかった。

実技テストは、広島大学教育学部音楽科の学生3名と授業者の、計4名で採点した。評価基準は生徒が自己・相互評価した基準と同じで、5点満点で採点した。採点者がまず“1, 2, 1, 2”とテンポを示した後に、生徒は1人ずつ無伴奏で演奏した。授業者は採点表を回収し、集計して得点の平均値を計算した。

3. 授業結果の分析と考察

B組の授業でペアで聴き合う際には一種の緊張感が生まれ、生徒たちもまじめに取り組んでいたにもかかわらず、実技テストの平均点は、A組4.14点、B組3.07点で、残念ながら、この数値からは評価カードの有効性を読み取ることができなかった。

授業結果の分析を行うために、実技テストの得点や期末筆記テストでのアルトリコーダーの運指に関する問題の正解者数や、生徒の音楽経験などをA組とB組で比較してみると次のようになった。(A組41名、B組40名である。)

- ・実技テストでの得点が2.5点以下の生徒数
…A組4名、B組15名
- ・筆記テストで運指の問題7問中全問正解者数
…A組31名、B組27名
- ・音楽の習い事を8年以上行っている生徒数
…A組11名、B組12名
- ・学校で音楽系のクラブに属している生徒数
…A組10名、B組11名

上記の調査から、A組とB組の間には、生徒の音楽経験や運指についての理解度に大差はないが、実技面で苦手な生徒がB組には多いことがわかる。授業での指導方法と評価カードの内容については、反省すべき点があるが、これについては後でまとめることにする。

今後の指導の参考にするために、期末テストで次の2つの質問を行った。

- (1) アルトリコーダーを吹く時に、難しいと思うことを書きなさい。特にない人は“なし”と書いてください。
- (2) 「威風堂々」を吹く時にあなたが気がつけたことは何ですか。

次に、上記(1)の質問に対する、A組とB組合わせて81名の回答を、項目別にまとめた。括弧内の数字は人数である。

〈アルトリコーダーで難しいと思うこと〉

- ・運指が覚えられない。(24名)
- ・譜読みに時間がかかる。(10名)
- ・高い音がきれいに出不い。サミングが難しい。(26名)
- ・低い音がきれいに出不い。(3名)

- ・曲のテンポに指がついていかないことがある。運指が遅い。(14名)
- ・高音から低音へ、低音から高音に音が跳躍するところで指がもたつく。(6名)
- ・次のプレスまで息が続かない。(2名)
- ・ソプラノリコーダーに比べてアルトリコーダーは穴と穴との間隔が広く、きちんと穴をふさぐことができない。(4名)
- ・特になし。(5名)

次に示すものは、上記(2)の質問に対する回答をまとめたものである。

〈「威風堂々」を吹く時に気がつけたこと〉

- ・サミングできれいな音が出るようにした。(26名)
- ・ファのシャープの運指に気がつけた。(7名)
- ・なめらかに音がつながるようにした。タンギングに気がつけた。(13名)
- ・跳躍の音をきれいに吹くようにした。(7名)
- ・プレスの位置に気がつけた。(6名)
- ・この曲の感じを出すように堂々とした音で吹くようにした。(8名)

・その他：楽しんで吹いた。運指や記号に気がつけた。高音は音を強めに、低音はゆったりとした音で吹くようにした。1つひとつの音をていねいに吹くなど。上記(1)と(2)の記述から、今後の指導方法や評価カードの内容について考えたことをまとめる。

指導方法については、授業の中で一斉指導だけでなく個別指導も行っていかなければならないということをも1番の反省点として感じた。1時間内に5人ずつでも曲中の1フレーズを演奏させて、特に運指でつまづいている生徒にはていねいに指導を行い、それ以外の生徒についても個人がもっている課題に即して、各自がより高まっていくことができるような指導過程を工夫しなければならない。指の巧緻性については、毎時間、簡単な音型で練習を行うことによって、また読譜力については、歌唱や器楽練習の中で、声に出して音符を読む機会をできるだけつくることによって向上が可能となるであろう。

また、サミングできれいな音を出すために工夫している点について、生徒たちは、“裏穴をなるべく小さくした”“右手の穴もしっかりと押さえるようにした”“出だしの高音は力まずに強く吹く”“低音から高音へ移る時に口の形を少し変えたりした”などと記述しており、それぞれに工夫していることがわかる。今後は、このような生徒たちの意見をクラス内で発表し合い共有する場を作っていきたい。そのためには、自己・相互評価表の内容についても、数値で評価するだけでなく、時には記述欄を設けることや、毎時間の学習目標

をいくつかの選択肢から選択させて、各生徒がそれぞれの学習目標を達成することができるような評価表を作成することが必要である。(増井知世子)

Ⅲ. 中学校2年生を対象にした授業の概要と考察

1. 授業の概要

中学校第2学年の生徒は、器楽活動において昨年度リコーダーを主に扱い(アルトとソプラノの混合)、今年度当初はギターを主に取り扱ってきた。そして2学期に入ってから、小グループによるリコーダーとギター混合の器楽アンサンブルの取り組みを行った。小グループにしたねらいは以下である。

- ①相互交流と評価の活性化が期待できること。
- ②グループ同士の相互評価が可能であること。
- ③1人ひとりの存在感が増し主体性の育成が期待できること。

また、ギターとリコーダーでは音色の相性も良く、第1学年からこれまで生徒たちが授業で行ってきた器楽活動のまとめをすることができると考えた。

今年度、筆者は中学2年生を2クラス担当しているが、どちらのクラスも明るく前向きに音楽活動することができる。その反面、表現を工夫し幅を広げるといふ点においては、これまでやや消極的な面が見受けられた。そうした生徒の実態も踏まえ、本取り組みを実施するに至った。

実施した授業計画は、以下のとおりである。

教材：「コンドルは飛んでいく」

作曲：D.ロブレス

編曲：原 寛暁

- 学習目標：①アンサンブルを行うための基礎的な技術と方策を身につけることができる。
- ②自分のグループ独自の表現を工夫することができる。
 - ③グループで協力して、効果的に練習を組み立て実践することができる。

学習計画

- 第1次：教材①の試聴、全体練習…(3時間)
- 第2次：教材②の試聴、全体練習…(3時間)
- 第3次：グループ編成と練習…(3時間)
- 第4次：中間発表、相互評価…(1時間)
- 第5次：最終調整、発表…(2時間)

2. グループ練習に至るまでの全体練習の実際

1学期終了までに、ギターの基礎技術の学習を終えていた。具体的内容は、ギターの構え方・単音奏法(アポヤンド奏法・アルアイレ奏法)・C-durスケールの練習・「Em, C」などのセーハを伴わない平易なコード

奏法 などであった。

(注：セーハとは、人差指を真っ直ぐ伸ばし、ギターの指板を6弦すべて押さえること。非常に重要で応用範囲の広い奏法であるが、初歩段階では極めて習得が困難である。筆者は、生徒に不必要な挫折感を与えるのを避けるために、中学2年の導入段階ではセーハの学習を行っていない。)

その後、「カントリーロード」や「空も飛べるはず」などの、生徒が学習した範囲内で演奏可能な比較的平易な楽曲を、G-dur設定で学習した。

ほぼすべての楽曲には、主要三和音すなわち「トニック(I)」「ドミナント(V)」「サブ・ドミナント(IV)」が存在し、しかもその他の複雑な和音は、(極めて乱暴な言い方をすれば)ほとんどの場合は前述の3和音に収束・変換が可能である。この主要三和音をいずれもセーハを伴わないようにするには、G-dur、またはその平行調であるe-mollに設定するのが最適である。

右手のストロークについては、全音符から2分音符、4分音符、その後より複雑なリズムへと、生徒の様子を見ながら難易度を段階的に上げていった。

2学期に入り、前述の「コンドルは飛んでいく」の取り組みを開始した。この楽曲は、筆者(授業者)が自主教材化したものだが、「ソプラノリコーダー」「アルトリコーダー」「ギター」の3パート編成として編曲している。調性はe-mollである。ギターパートで、ドミナント(V)として数カ所「B₇」コードが出現するが、セーハほど困難でないため、生徒の「上達のための課題」として温存した。

最終的にグループを編成した際には、いずれかのパートに固定されるわけであるが、導入段階では全パートの全体学習を行った。個人差は大きかったが、巡回個人指導によって極力対応し、ほぼすべての生徒が一通り演奏できるようになるまで学習を継続した。

3. グループ練習定着のための自己評価表、及びリーダーのための指導マニュアル

本校は、1クラス40名編成(男子20名、女子20名)となっているため、4つのグループに分け、1グループ10名編成とした。グループ内のパートバランスは以下である。

- ①ソプラノリコーダー：3名または4名
- ②アルトリコーダー：3名または4名
- ③ギター：3名

授業実施にあたっては、「自己評価表及び指導マニュアル」(資料1)を配布し、時間毎に回収・チェックを行った。

資料1 自己評価表及び指導マニュアル

自己評価・グループ・リーダー用マニュアル

グループ練習(2) 2年 組()グループ

〈共通目標〉	
①練習を軌道に乗せる。	
②リーダーを中心に、全員が協力する。	
③各パートをテンポよく合わせて演奏できる 〈A～C評価は A：できた B：ふつう C：できなかった〉	
①練習を軌道に乗せる。	〈A B Cの3段階評価〉
②リーダーを中心に全員が協力する。	〈A B Cの3段階評価〉
③各パートをテンポよく合わせて演奏できる。	〈A B Cの3段階評価〉
〈今日できるようになったこと〉	〈次時への課題〉

〈グループ練習の進め方の一例〉

- ①楽器と楽譜(譜面台)の用意を促して、合奏できる隊形をつくる。
- ②「じゃあ、曲の始めからみんなで合わせてみます。」
「1, 2, 3, ハイ!」～演奏が始まる。
- ③演奏しながら、同時にグループの演奏を聴く。
- ④良かったところは評価する。改善点は、課題として指摘する。
または、「今の演奏を聴いて、何か気づきはないですか?」と聞いてみる。
- ⑤出た課題を、次の練習に生かす。

理想的には、ここまでルールを引くことなしに自然にリーダーが出現し、創意工夫をしながら練習を組み立てていけることが望ましい。しかし、実際にはリーダーが不在、またはリーダーに対しての協力体制が十分に構築できないケースが多い。元々のクラスのムード等に大きく左右される状態では、授業の取り組み手法としては脆弱である。

第一歩を安心して踏み出せる状況を作ってやり、その後軌道に乗ってから手を離してやる方が、往々にしてうまくいくものである。実際、この自己評価表と指導マニュアルは有効に機能し、2クラスの各グループとも、リーダーを中心とした創意工夫のある練習ムードに結びついていったようであった。もちろん、各グループの自己評価表の結果を参考にして、途中段階の巡回指導を細かく行うことは必要であった。

各グループの練習がほぼ軌道に乗った段階で、筆者は全体に対して、次のような「投げかけ」を行った。「どのグループも随分合うようになって、うまくなってきたね。このまま中間発表をしてもいいけど、できればもっと各グループならではの色が出てきたらいいな。うまいけど、どのグループも同じような演奏だと、聴いている方もつまらないからね。例えば、テンポを変えてみたり、強弱をつけてみたり、楽譜にないパターンを加えてみたり。今後の練習では、もっと自分たちの特徴が出せるように、練習を工夫してごらん。」こ

の投げかけによって、各グループの練習の主軸は「工夫すること」に移っていき、また練習自体も一段と活性化されたようであった。

中間発表の段階では、演奏は各グループとも比較的工夫点が垣間見えたものの、それが十分に演奏に反映されるには至っていない状態であった。この中間発表では、各個人が他グループの演奏の評価をカードに記入し、グループ別のカゴに投函したものを演奏後に閲覧し合う、という相互評価を行った。

グループ間の相互評価では、互いの長所や課題などを建設的に指摘し合う内容となっており、本発表に向けての練習課題が整理できたようであった。

4. 本取り組みを振り返って

1時間程度の練習を経て、本校講堂ステージにて「本発表」を行った。本校講堂は明治時代からの歴史ある建造物で、内部の音響効果もかなり優れている。そうした場で発表することにより、生徒たちが良い緊張感をもって演奏に臨むことを期待した。

演奏は、どのグループとも工夫点が明瞭に現れ、上達が見られた。中には、この講堂で演奏するというプレッシャーに潰されそうになったグループもあったが、そうしたことも含めて、生徒たちにとって今後の活動につながる良質な体験を共有できたと考えている。

学習指導要領の目標の1つに、「楽曲構成の豊かさや美しさを感じ取り、表現の技能を伸ばし、創造的に表現する能力を高める。」とある。1年間の授業での様々な活動を通してこのような力を育成することは、「生涯にわたって芸術を愛好する態度」を養うことにつながっていく、と考える。アンサンブルは1人では決してできない音楽活動であり、絆が生まれ演奏の魅力は広がり、豊かになる。その反面、個人が集団に隠れてしまうと成立しないという点で、少人数のアンサンブルは非常に難しい。

この取り組みを通して生徒たちに自己表現をより豊かに工夫させ、アンサンブルの魅力をより身近に感じさせることができ、より発展的な活動へとつながる力を育成できたのではないかと考える。

また、授業の中で「自己評価・相互評価」を取り入れたことについてであるが、今回の取り組みでは生徒個々の自己評価は行わず、自分の所属するグループの活動実態について評価するという形をとった。演奏の向上のためには、個人技術の向上は当然大切である。しかし、アンサンブルという活動形態においては、それ以上に自分と他者との関わりの中で活動がいかに機能しているのか。また、どのようにすればより良く活動が機能するのか、という観点がむしろ重要であるので、今回の取り組みについてはあえて触れなかった、というのが実態である。グループとして、相互の関わりを考察し、課題を共有することについては、「グループ自己評価」及び「中間発表における相互評価」は有効に機能したと考えている。そのほかにも、アンサンブルを構築していく過程において、生徒たちがどこでつまづいているのかを授業者が的確に把握し、グループに対して適切な指導を加えていく上で、評価表が大いに参考になった点もあげておきたい。

反面、課題として、グループを構成する個々の生徒ごとの実態把握、つまり個々への対応という観点は、今回の取り組みでは薄かったと言わざるを得なく、改善の余地がある。この点については、次年度以降に個別の自己評価をバランス良く導入し、さらに活動を洗練させていければと考えている。

今回の取り組みを総括的に振り返りつつ細かく軌道修正し、次年度以降への授業実践へより良い形でつなげていきたい。(原 寛暁)

IV. おわりに

昨年度までの研究では、グループ活動を中心としたアンサンブルの授業に、自己評価表・相互評価表を取

り入れ、かなりの学習成果を上げることができた。そこで、本研究の第1の実践では、アルトリコーダーの指導に自己評価表・相互評価表を取り入れることを試みた。学習者の主体的活動に必要な基礎としての技能習得にも、自己評価表・相互評価表が有効であるのではないかと考えたからである。実際に、一昨年の「箏を取り入れたアンサンブルの工夫」という授業では、題材の目標はアンサンブルの完成であったが、題材の最初に行った箏の演奏技術を習得する過程では自己評価表・相互評価表が有効であった。しかし、今回の授業の実験群と統制群の比較からは、有意な効果が見られなかった。原因として、母集団の技能にもともと差があったこと、期間が短期間であったこと、自己評価表の項目の設定の仕方にもう少し工夫が必要であったこと等が推測される。自己評価表の項目は、学習者が学習内容をしっかりと把握し意識するための手助けであり、事細かな内容が挙げられるべきであろう。自己及び他者による5段階評価は、学習への意欲を高めるためのものである。継続して学習を続ければ成果が上がったかもしれない。

本研究の第2の実践では、これまでの研究と同じく、アンサンブルの授業にグループの自己評価とグループ同士の相互評価を取り入れた。グループで表現を工夫し、自分たちのアンサンブルを作り上げていく過程では、やはり自己評価表と相互評価表は有効であった。自己評価表は、グループの活動目標や活動内容を把握させるのに非常に役立ち、これによって活動自体が活性化し、学習を効率よく進めることができた。また、グループ同士の相互評価表は、他者の価値観との交流や、さらなる学習意欲をかき立てるのに効果的であった。また、グループとしての思いや、他作品への批評を評価表に書くことは、新学習指導要領でも目指されている「言語活動の充実」に繋がるものとして、今後いっそう取り入れていくことが必要になるであろう。

本研究を通じて次の課題が浮かび上がってきた。今回のように、グループ活動を主体とした表現活動では、自己評価・相互評価は十分に機能していたといえるが、基礎・基本の学習でもこれが有効に機能するか、ということである。音楽科教育にとって、基礎・基本の充実は、音楽科の学力とも密接に関連した命題である。このプロジェクトのキー・コンセプトである、学習者の主体的活動を通じた学習内容の定着が、歌唱練習や器楽練習、及び視唱練習でも可能かどうかを今後の課題としたい。(三村 真弓)